

聖書 詩編 第103篇

- 01 わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこぞって、
聖なる御名をたたえよ。
- 02 わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。
- 03 主はお前の罪をことごとく赦し、病をすべて癒し、
- 04 命を墓から贖い出してくださる。慈しみと憐れみの冠を授け、
- 05 長らえる限り良いものに満ち足らせ、驚のような若さを新たにしてくださる。
- 06 主はすべて虐げられている人のために、恵みの御業と裁きを行われる。
- 07 主は御自分の道をモーセに。御業をイスラエルの子らに示された。
- 08 主は憐れみ深く、恵みに富み。忍耐強く、慈しみは大きい。
- 09 永久に責めることはなく、とこしえに怒り続けられることはない。
- 10 主は私たちを、罪に応じてあしらわれる事となく、
私たちの悪に従って報いられこともない。
- 11 天が地を超えて高いように、慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。
- 12 東が西から遠い程、わたしたちの背きの罪を遠ざけてくださる。
- 13 父がその子を憐れむように、主は主を畏れる人を憐れんでくださる。
- 14 主はわたしたちを、どのように造るべきか知っておられた。わたしたちが塵にすぎないことを御心に留めておられる。
- 15 人の生涯は草のよう。野の花のように咲く。
- 16 風がその上に吹けば、消えうせ、生えていた所を知る者もなくなる。
- 17 主の慈しみは世々永久に、主を畏れる人の上であり、恵みの御業は子らの子らに
- 18 主の契約を守る人、命令を心に留めて行う人に及ぶ。
- 19 主は天に御座を固く据え、主権をもってすべてを統治される。
- 20 御使たちよ、主をたたえよ、主の語られる声を聞き、
御言葉を成し遂げるものよ、力ある勇士たちよ。
- 21 主の万軍よ、主をたたえよ、御もとに仕え、御旨を果たすものよ。
- 22 主に造られたものはすべて、主をたたえよ、
主の統治されるところの、どこにあっても。わたしの魂よ、主をたたえよ。

説教 『神様の顧みの下に生きる幸い』

◆ここに2017年の元旦を迎え、このようにご一緒に神様を礼拝できます幸いを、心から感謝いたしたくと存じます。共に聖書を通して主の御言葉に聞きたいと思っております。只今司会者によって朗読されました詩編103篇であります。今日の礼拝の始めにおきまして、その1節から5節を交読いたしました。それで、今朝、この詩編103

篇によって説教するようにと促されたものですから、振り返って調べてみますと、大阪北教会の聖日礼拝式順がこの形に定着しましたのは、2010年の事であります。ですから、わたしたちはこの7年の間、詩篇第103篇の1節～5節を毎週交読してきたのであります。このように式順が定着するには、そこに至る導きがあったわけですが、私自身、今更のように驚いております。かかる次第で、詩編103篇の冒頭の1節～5節を、わたしたちは毎週礼拝で繰り返し交読して来たのであります。

◆私はこの年末年始、例年にも増して多忙だったので、テレビのニュース等もほとんど観ないで元旦を迎えたのですが、只今、司会者のお祈りにもありましたように、この2、3日の間にも、様々な事件や事故、忌まわしいことが内外で起こっているだろうことは、昨今の内外の情勢からして想像に難くありません。人が経験する種々様々の苦難、悲惨、災厄を軽々にあげつらうことは誰にも出来ない事ではありますが、しかし、聖書が証する試練の質が、それら一切を包含し、凌駕するものでないならば、聖書に救いを求めることは、無駄ですし、空しいことでもあります。もしこの世の中に起こっていることが、聖書に記されていることよりもっと深刻だと仮定するならば、その救いを聖書に求めても無駄だと思えます。なぜならば、聖書に記されていることよりも、もっと深刻な事態がこの世界に起こっているとすれば、聖書はその事態の大変さを知らないということになるからであります。もしそうならば、元旦早々に、聖書の神様を拝み、聖書を読むということはないと思えます。

◆特にこの7年間、毎週交読して来ました1節～5節はこうであります。「わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこぞって 聖なる御名をたたえよ。わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。主はお前の罪をことごとく赦し、病をすべて癒し、命を墓から贖い出してください。慈しみと憐みの冠を授け、長らえる限り良いものに満ち足らせ、驚のような若さを新たにしてください。」これはこの詩編103篇の作者自身の経験であります。ここに書かれてある事が、今申しましたように、この世で毎日起こっている事柄よりも、軽い経験であるならば、いくら聖書を読んでも無駄であります。けれどもこの詩編作者の経験は並大抵のものではありません。

◆「主はお前の罪をことごとく赦し、病をすべて癒し、命を墓から贖い出してください」と彼は告白しています。「主はお前の罪をことごとく赦し、病をすべて癒し、命を墓から贖い出して下さる。」どれほどの罪でしょうか。どれほどの病でしょうか。わたしたちは、主イエス・キリストの御生涯と御業を想起しないではおられません。

「罪」の一言に人生の完全な破綻、破滅の意味が込められています。その罪を、「ことごとく赦される」経験は、人生の地獄から天国への飛翔であります。「病」と一言で言いますが、心身の「病」には、人間のありとあらゆる苦難が凝縮しています。その「病をすべて癒される」経験は、正に、「命」を「墓」から贖い出される経験で、正に死者の復活です。これがこの詩編作者の実体験なのです。

◆この詩編は少し長いのですが、冒頭の第一声が、「わたしの魂よ、主をたたえよ」で始まります。そして今申しましたように、5節までに、自分自身の人生経験、信

仰体験を記しています。それから6節～13節において、おのが民・イスラエルに対する神の慈しみについて記しています。そして14節～18節においては、「主の慈しみは、世々永久に、主を畏れるもの上にあり、その恵みの御業は子らの子らに及ぶ」ことが強調されています。そして19節～22節では、天の御使い、天の万軍、主に造られた全ての者に「主をたたえよ」と呼びかけます。この詩編は長いと申しても、全篇22節であります。しかしその内容は実に広大無辺、かつ深甚であります。

◆皆様すでにお気づきのように、この詩編の冒頭は、「わたしの魂よ、主をたたえよ」であり、その末尾もまた、全く同じ「わたしの魂よ、主をたたえよ。」であります。そして、この私自身の、主を讃えないではおられない信仰によって、この詩編作者は、全イスラエルと全世界、全被造物を抱きかかえているのです。慈しみをもって抱擁しているのであります。この詩には何度か、「主を畏れる人」という表現が出てまいります(11節、13節、17節)。「主を畏れる人」とは、神様の計り知れない御恵み、絶えることのない御計らいを決して忘れることのない人のことであります。今申し上げたいことは、神を讃えないではおれないほどの信仰は、人類の歴史と全被造物を包み込むほど偉大だという事であります。ですから私達一人一人の経験は、唯一人の経験なのですけれども、神様の如く、全世界を慈しみで、抱きかかえる事ができる程に偉大だと言うことです。神を畏れ、神を讃える人は「奇跡の人」です。

◆私たちは、昨年のアドベントからクリスマスにかけて、この歴史が、奇跡の連続であり、そしてその極まりが主イエス・キリストの「処女降誕」だと申しました。私たちの存在は「処女降誕」ではありませんけれども、私たち人間のこの「わたし」が存在するという事は、文字通り奇跡の連続のような事として、私が今・ここに存在するのだという事実を強く意識させられてきました。ですから、この私の過去を遡って、先祖を遡って、そのどこかの一部分が、一コマが欠けていても、私が今ここにいるということはなかったわけですね。そんな当たり前のことを回想するだけでも、わたしが今ここにいるということは本当に奇跡の連続なのです。主イエス・キリストの誕生にまつわる記事において「天使」がしばしば現れます。イエス様の誕生のことを最初に知らされたのは、ベツレヘムの郊外で野宿しながら夜通し羊の番をしていた羊飼達に対してでありました。「天使」が彼らに臨み、その事を伝えたのです。これは神様が私たちに目を留めていてくださる証拠なのですね。そんな事を考えますと、わたしたち一人一人の存在で、神様の御心によらないで存在しているような人は一人もいないということです。もう一度、この詩編にもどります。最初の一行が「わたしの魂よ、主をたたえよ」であり、最後の一行も「わたしの魂よ、主をたたえよ」であります。彼はイスラエルと全被造物を、本当に救われた自分の経験で抱きかかえています。そういう意味で、私たちが、聖書を通して神様の御心に触れ、その御言葉に導かれているということは、誠に稀有なことであります。

◆わたしたちも昨年、教会としても愛する兄弟姉妹を主の御許に送りました。またその間に、私自身も肉親の下の弟を、まだ68歳でしたが、がんで天に送りました。このようなことで愛する者を思いがけない仕方で失うわけですから、悲しみという

ものは当然であります。そういうことが、今や世界で日常茶飯事になっているのですね。そうなのですけれど、わたしたちはこのようなことを通して、神様の顧みが、永遠不変である事、常に降り注がれていて絶える事がない事をわたしたちは本当に、みんなで実感したと思うのです。確かに今まで一緒に礼拝していた者が、その姿がないわけですね。しかし、わたしたちは、その喪失にはるかに優るものを遺族共々に共感したのであります。そして神様が私たちに目を留めてくださることは、わたしたちは、その下にあることを信じておりますけれども、天に召された者たち、一人一人が神様のみ前にあって、神様と共にあって、日々私たちの幸いをひたすら願いつつ、私達を顧みていてくれることを、身近に覚えました。確かにわたしたちは願いに反して、大事なものを失うわけです。しかし、失うけれども、それに勝る祝福を受けるのです。決して失われることのない永遠の幸いを受けるのです。

◆この詩編の作者は、「主の御計らいを何一つ忘れてはならない。」こういうふうにご2節で申しております。ここを読みながら私は「あーそう言えば、おとしの7月19日に竹村好香姉妹が召されましたが、生前御自宅で療養しておられる時に、お見舞いに行きまして、お部屋に額がかかっている、そこにしるされていた言葉を覚えています。「神の計らいは限りなく、生涯わたしはその中に生きる」。神様の計らいは、限りなく、生涯わたしはそのなかに生きる。それが103篇の著者の経験であり、わたしたち自身の経験でもあります。ですから繰り返しますように一人一人の人間が神様をたたえるというのは、これは比べるべきものがどこにもみいだせないということなのですね。わたしたちが神様を礼拝しますのは本当にそれに代わるものがないからです。「クリスマス」は「キリストを拝む」と訳すべきです。けれどもキリストを拝むのはクリスマスの時だけでなく、毎日をクリスマスとしてキリストを拝むことをしましよと申し上げたのです。そのような次第でありまして、わたしたち一人一人、わたしたちが召し入れられた信仰を、日々を畏れかしこみつつ歩みたく思います。これからの日々の事、2017年の成り行きのことを心にかけない人は一人もいないわけです。しかしこの事が、必ず世界の平和につながるのです。

◆2017年は宗教改革500年にあたる記念の年であります。マルチン・ルターは本当に聖書を読み、聖書に捕えられ、神様の恵みに与った人だと言ってよいでしょう。私達も、もう一度、この書を、この聖書を、命の書、魂の書として読み、主の御恵みに心底与る新年の日々でありたく思います。

◆お祈りいたします。

憐れみ深い主イエス・キリストの父なる神様。

今日このように愛する兄弟姉妹、家族ともどもあなたを礼拝する恵みを与えてくださったことを心から感謝いたします。この新しい年、どうかあなたを覚えつつ、主を信じつつ、御心に適う日々を歩ませてください。私たちの礼拝が、交わりが、世の人々の慰めとなり、世界の平和を造り出すものとしてください。

この祈り、主イエス・キリストのみ名を通しみ前におささげいたします。アーメン。